

周東のぞみキリスト教会に赴任し、妻と別居して1年8カ月がアットという間に過ぎました。

朝毎、携帯電話を通してデボーションをしています。妻は英語の聖書、わたしはヘブル語聖書一、同じ箇所を読み合わせます。妻の英語は発音が時に正しくないので注意します。ところが、わたしといえば、50数年前、4年間も学んだヘブル語から次第に離れており、今や、読み方までもあやしくなりかけていたのです。これではいけないと思っていた時ですー、植村環さんの「父母とわれら」という小さな本を手にししました。その終わり部分に、環さんの敬愛していた父・「植村正久」の晩年のエピソードが紹介されていました。

信州・野尻湖の山荘で主治医と信仰の話をしていた時、何を思い立ったのか、初級ドイツ語の文法のおさらいを始めたというのです。

環さんは、「何故、今頃になって、お父様はおさらいする気になったのですか」と尋ねました。

すると、ニコニコ笑いながら、「ぼくはね、天に召されてから、許されれば、M・ルターとドイツ語で自由に話したいんだ」と言うのです。それほど御国に対する思いを身近に引き寄せていたことが羨ましく思われました。

その時です、縁薄くなりかけていたヘブル語聖書を思い出しました。わたしも、できることなら、天の御国において、アブラハム伯父さんと「シャローム」と挨拶を交わし、二言三言ヘブル語でお話をしたいと思われたのです。おそらくは「あなたのヘブル語は、ヘブル語とはいえませんが、ヘバル語ですなー」と言われるかもしれません。

それでも、日々、声を出して読んでいます。いつしか、われながらスムーズに読めるようになったと思います。はたから見れば、老いて、何をいまさらと言われかねません。それでも、族長アブラハムとの再会を楽しみにしながら音読につとめています。